

● 評者・川村 二郎(文芸評論家)

旧正月に催される尾張大國靈神社(國府宮)の裸祭は全国的に有名だが、特に神事の荒々しさで知られ、今年も少なからぬ怪我が出たという。この神社には人間をイケニエとして神に供えたという伝承があり、それが形式化され儀礼化されても、祭の最中には原始的な暴力の記憶がよみがえるのかもしれない。

日本に人身御供の風習が実際にあったのかどうか。柳田国男が最初は否定し、後に一転して肯定したという例でも分かるように、これはすぐぶる確認しがたい問題にちがいない。「人身御供の民俗学」と副題を置いたこの本は、国府宮の祭の詳細な分析から始め、諸国の人身御供伝承を持つ古社を巡って、伝承が現在どのような形で表現されているかを調査し考察している。

もともと祭の中心にいた女性が、やがて中心から排除されて行くプロセスとか、仏教の殺生戒が一般に広まって肉食が忌避されて来た事情

原始の闇に向き合う



新曜社
2500円

神、人を喰う

六車由実著

とか、生きた人間の代理として人形が供えられるようになった事例とか、さまざまな角度から丹念な検証が進められているが、多様な局面を通じてうかがわれる基本の志向は、人身御供という主題を否定したり回避したりするのでなく、むしろその気色の悪さに正面から向き合うところにある。

つまり日本の過去に食人などという野蛮な風習があったはずはない、あるいは、動物を殺していたのが人間の話にすりかえられたのだ——この種の言説に著者は、主題の持つ力を弱め、近代的な合理化を求め試みとして強く反発する。ただしその際、著者自身が近代人であり、いわば文明の光の世界から、それ以前の闇の領域を見ていることを、はっきり自覚している。

文明への嫌悪から原始にあこがれる、情緒的な闇の讚美者とは、一線を画している。だからこそ、稀薄化した生の実感を伝承を通じてたしかめたい著者の願いは、いかにも納得できる。

◇むくろま・ゆみ 一九七〇年、静岡県生まれ。東北芸術工科大学東北文化研究センター研究員。